

同朋大学佛教文化研究所報

第 31 号

発行日 平成三十年三月三十一日
 編集・発行 同朋大学佛教文化研究所
 代表者 安藤 弥
 〒四五三-八五四〇
 名古屋市中村区稲葉地町七の二
 TEL (〇五二) 四二二-三三三三
 FAX (〇五二) 四二二-三三六九
 e-mail: bc-inst@doho.ac.jp
 (題字は池田勇諦元学長)

このたび、同朋大学仏教文化研究所の第七代所長を拝命いたしました。もとより若輩浅学の身であり、諸賢のご指導をいただきながら、せいじいっぱいつとめてまいりたいと思えます。よろしくお願い申しあげます。

さて、本研究所は昭和五十二(一九七七)年度の設立から数えて今年度でついに四十周年を迎えました。本学初代学長稲葉圓成先生の「学園設立の趣旨」の精神に基づき、「広く仏教文化の研究と興隆に寄与し、もって地域社会に貢献する」という基本姿勢のもと、本研究所は真宗史・仏教文化研究を中心に諸活動に取り組んでまいりました。その歩みと記録については平成十九(二〇〇七)年度の設立三十周年の際に、それを記念する史料展示とその図録『仏教文化研究の軌跡』においてまとめ、

また三十五周年にあたる平成二十四(二〇一〇)年度の史料展示図録『仏教文化研究の展開』においても追加整理しました。

この十年に限っても、親鸞聖人七百五十回御遠忌法要を機縁として『誰も書かなかった親鸞 伝絵の真実』(法蔵館、二〇一〇年)、教如上人四百回忌を機縁として『教如と東西本願寺』(法蔵館、二〇一三年)を編集・刊行するなど、本研究所は特に真宗史に関わる研究成果を中心に世に問い続けています。

そうした中で四十周年を迎えるにあたって近年、取り組んでいる重要な作業の一つに、設立以来の活動で蓄積してきたこれまでの調査内容をデータベース化して保存整理し、的確な開示の方向性を探るといふものがあります。

本研究所の調査活動は現地踏査を基本として寺院所蔵資料を悉皆的に調査し、その内容を把握しようとするものであり、四十年にわたる情報蓄積はほう大な量となります。と同時に四十年の蓄積があるがゆえに、必ずしも統一

された情報形態になっていない部分もあります。特にフィルムカメラで撮影した史料写真の劣化への対応は喫緊の課題です。そうした性格を持つ内容をもとのように総合的な学術データベースとして機能させるか、画面デザインやリンクなどの機能充実という課題も含め、所員・客員所員を中心に現在、苦心を重ねて取り組み、構築中です。

また、四十周年を記念して今年度を実施したのはシンポジウム「アジア仏教の死者・供養観」でした。その詳しい内容は来年度の研究所紀要でまとめる予定ですが、真宗史研究とともに蓄積してきたアジア仏教研究の取り組みの一端、また客員所員をおつとめいただいている国内外の先生方の当該テーマに関するご見識を披歴していただくことになりました。たいへんうれしく、ありがたく思います。関連して開催した後期史料展示では初めて、「仏像」をテーマとした《実物資料に学ぶ仏教文化》展を実現でき、この点も新境地を開いたものと言えます。

第七代所長就任あいさつ

ならびに 研究所四十周年に寄せて

所長 安藤 弥

この四十周年記念事業の実施にあたっては、かつて本研究所の研究顧問をおつとめいただいた故前田惠學先生の学恩によるところが大きいことも記して深謝の想いを表したいと思います。

文系学術活動をとりまく状況は本意ながら厳しさを増していますが、そうであるからこそ、さまざまな研究活動を実現していく本研究所の存在意義はますます大きくなるものとも言えます。これからも精力的に研究活動にとりくみ、その成果を学生教育、社会貢献に還元し、すこやかな姿を示し続けながら、この四十周年を通過点として、次は五十周年に向けて着実に歩んでいきたいという決意をここに表明いたします。

大和方面真宗寺院調査をふりかえる

二〇一七年九月六〜八日

青木 馨

五五〇年前の応仁二年（一四六八）秋、蓮如上人が高野山を経て吉野から南下し十津川方面へ足を運ばれたことは、「吉野紀行」により知られる。悲しくなる程の険しい山々を歩かれた地を、かねてよりの念願であった調査に出掛けた。大和地域は、覚如・存覚の教線が基盤にあり、興味深い地域であるが、過疎化も進み研究者も永らく訪れておらず、近年の調査報告が乏しく不安と期待の調査でもあった。

初日の調査地は、宇陀市室生の向測正定寺（本願寺派）である。ここには、『存覚袖日記』に、大和向測淵実の相伝する方便法身尊像と源空・親鸞の連座像に存覚が裏書をしたとするものが見られる。

寺には後者が伝存しており、存覚の手になる原本の伝来にまず感動であった。早くより傷んだ可能性もあり、元禄期と昭和の二模本により復元的にうかがえる。またここは、親鸞の母吉光女女の伝承もあり、同人の毛髪による繡字六字名号「吉光尼公毛のお名号」も伝わる。

正定寺は近世も「常楽台門徒」であり、名実共に、大和地域の初期真宗以来の存覚の教化拠点であったことが知らされた。寺院近隣の廟所なども御住職にご案内いただき、そのため調査は夕刻にまで及んだ。

この日は、近鉄橿原神宮駅前のホテルに宿泊したが、青木のみ初日はここに直行したため、橿原神宮に立ち寄った。近代創建の「神宮」の風格を実感した。

二日目は午前に、吉野の飯貝本善寺（本願寺派）を調査した。吉野川沿いの高台にそびえる重厚な伽藍は、見事な景観である。ここは、蓮如の十二男実孝の入寺した寺で、まずその経緯が記された「皆成院実孝書」を初めて実見した。そして、親鸞の遺骨に添えられた実如・実悟の

文書、実如裏書の二幅本親鸞聖人絵伝、実孝書状三通など、他の寺院とは趣の異なる戦国期の史料を調査した。

そして諸殿も拝観させていただき、住職御一家のお心遣いに敬服しつつ辞去した。飯貝の町並も過疎化で、伝統的景観も危うくなっていた。門前の「平宗」にて昼食をとり、次の目的地へと南下した。

続いて目指したのは覚如の弟子乗専の開基を伝える円光寺（五條市西吉野町陰地）と初期真宗の高僧連座像の所蔵情報のある浄称寺（五條市大塔町辻堂）であった。この二か寺は、事前に住職との連絡がつかず、住職は平素不在で地元管理らしいという程度の情報しか得られなかった。いわば取り敢えず行ってみる、ということであった。

円光寺（本願寺派）は、ナビにより検索はできるものの、付近の道筋は出ない有様で、国道二〇号線沿いに「松川御坊」への立て札を見つけた。ここから脇道に入り登り坂を走った。つづら折りの山道がだんだんと心細くなり、対向車が来ないことを祈るばかりであった。本当に寺があるのかと不安ななか、立派な家が一軒あったが不在であった。



正定寺廟所石碑



本善寺蓮如堂拝堂

さらにナビなき道を登り進むと、何と心細い道に反して立派な門と本堂が現れた。それが「松川御坊」であった。しかし、本堂も庫裡も閉ざされ、無人であった。伝来するという四高僧連座像を確かめるすべはなかったが、本堂軒下には昭和五十九年の大法要の駒札が保存されていた。「開創六百五十年・開基乘専大徳六百二十五回忌」とあり、出雲路乗専の教線が実感でき、たった一軒の隣家の主人からの聞き取りにより、蓮如の足どりが今に伝わってきた。

蓮如は、「十津川・のながせ・鬼が城」への難所をいくつか歌に詠む。「これほどに、はげしき山の道すがら、のりのゆかりにあらでやはゆく。」仏法のために難所を歩んだ蓮如の姿と、誰もいない山奥の地で、無人の御坊が確かに護られている姿とが、結びついていようであった。

次に浄称寺（本願寺派）に向かった。国道一六八号線天（てん）ノ川（熊野川）の川べりの低地にお寺はあった。そこが元地であり、周囲は平成二十三年の台風十二号の被害の改修が大規模に進められていた。洪水のたびに道路が上がっていくようであった。

偶然にも住職が在寺され、本堂は美しく磨かれていた。そして、高僧連座像（十祖像）を出してもらえた。宮崎圓遵先生以来五十年余り研究者の目に触れなかった一幅である。「これか」と目をみはった。源空・親鸞・覚如・乗専……。傷みの中にも描線がほぼ残り、札銘も読み取れた。上下の讀文も含め、きわめて優秀な連座像であることをあらためて



浄称寺蔵高僧連座像

認識した。住職に保管の気遣いなどアドバイスさせてもらい、寺歴等を確認する中で、この辺

りを昔は「野長瀬」と言ったことや、ここまで蓮如さんは来られ、この先には行かれなかったことなどを聞いた。龍谷大学所蔵の文明二年（一四七〇）蓮如下付の修復方便法身尊形の裏書に見る地名でもあることが頭をよぎった。

こうして夕刻、寺をあとにしさらに山々を越えひた走り、十津川温泉最奥の神湯荘に投宿し、激しい雨の中、温泉と山の料理を堪能した。

翌日は、十津川役場に近い資料館を見学し、この地域の歴史や地域性に触れた。自治体史などの情報も確認できた。資料館の道向かいの売店駐車場には、『貝塚御座所日記』に記載される天正十四年（一五六六）本願寺頭如の十津川湯治についての看板もあった。そして、熊野古道小辺路を眺めた後、さらに南下し、熊野本宮大社を訪れた。ここは、『親鸞伝絵』に「熊野夢想」段を有する真宗においても無縁ではない所である。横列に並ぶ社殿の一つに「証誠殿」との札があり、『伝絵』に見る名称が今に伝えられていることに、小さな発見をしたように思われた。こうして三日間の充実した調査を終え、尾鷲経由で、帰途についた。



熊野参詣道小辺路



円光寺本堂前集合写真

本慶寺所蔵書籍群（本慶文庫）整理作業中間報告

本慶寺（真宗大谷派・岐阜県海津市南濃町）の住職山上正宣氏から、同寺所蔵の書籍群について相談を受けたのは二〇一二年度のことである。本学第三代学長山上正尊を輩出した同寺には、学術書はもろろん、学園関係資料も多く残されていた。

その後、法宝物の一部とともに書籍群の寄託を受け、整理に取り掛かったが、相当な時間を要することになった。多くの関係者が作業に関わり取り組んでいるが、ここで、整理作業の中間報告と今後の見通しについて、松金直美客員所員よりレポートする。

〔本慶寺所蔵書籍群の概要と整理状況〕

本慶寺所蔵書籍群は、数多くの書籍から構成されている。本慶寺から寄託を受け、小型のダンボール（縦三三・〇cm×横二三・〇cm×高二四・〇cm）に収納して保管している。概要を把握するため、刊本・写本・ノート類に大別し、まず刊本の整理から着手した。

刊本はダンボール五一箱分あり、部数は五〇〇部弱にわたる。大まかな仮目録を作成後、半分ほどの二六箱分まで書誌情報の確認作業を進めた。

その内容は、宗乗（真宗学）や余乗（仏教学）などの仏教書が大半であり、真宗寺院蔵書群の特徴を如実に有している。書籍の最も多い所蔵者あるいは入手者が山上正尊である。次にその経歴を簡単に紹介する。

〔山上正尊の経歴〕

山上正尊は明治二十三年（一八九〇）一月、本慶寺にて生まれた。東京巢鴨の真宗大学に進学後、移転・名称変更した京都の真宗大谷大学において、大正二年（一九一三）七月に本科を、大正六年六月に研究科を

卒業している。

そして大正十五年（一九二六）九月に三十六歳で、名古屋別院境内に設立されていた私立真宗専門学校の教授となった。六十歳となった昭和二十五年（一九五〇）四月には、開学した東海同朋大学に教授として就任した。昭和三十二年（一九五七）一月には六十七歳で第三代学長となり、それ以後も、同朋学園の要職を歴任した。

真宗大谷派においては、昭和二十七年（一九五二）二月に宗派における学階の最高位である「講師」となっている。安居では昭和二十一年（一九四六）に次講で『口伝鈔』を、昭和三十一年（一九五六）に本講で『一念多念文意』を講じている。

なお、本慶寺住職には昭和二十八年（一九五三）十二月に六十三歳で就任した。昭和四十四年（一九六九）七十九歳で没。^①

〔特徴的な書籍〕

本慶寺所蔵書籍群において調査済のものの中から、興味深い書籍をいくつか紹介したい。

まず、天台教学関係である。『冠導天台四教儀集註』六巻は、明治二十九年（一八九六）十一月三十日に京都の興教書院から発行された刊本である。それを正尊は、東京巢鴨にあった真宗大学の在学中である明治四十三年（一九一〇）九月に入手している。

『法華玄義釈義講述』十五巻は明治二十九年八月八日に、『法華玄義釈義傍註』二十巻は明治三十二年（一八九九）から同三十五年（一九〇二）にかけて、いずれも京都の貝葉書院から発行された刊本である。これらを正尊は、京都の真宗大谷大学で購入している。両書とも購入年は記されていないが、真宗大谷大学は明治四十四年（一九一一）十月十三日に京都高倉で仮校舎にて開校し、大正二年（一九一三）九月十五日に京都小山の新校舎に移転している。少なくとも京都で開校後に購入したとみられる。

次に、江戸期の東本願寺教団における僧侶宗学機関である学寮の初代講師に位置づけられている光遠院恵空（一六四四～一七二一）の所持本がいくつか所蔵されている。

『帰命本願抄』三卷・『西要抄』二卷・『父子相迎』二卷は、慶安二年（一六四九）九月に京都の村上平楽寺から七卷合本として刊行されたもので、恵空は貞享五年（一六八八）四月下旬に購入した。正保二年（一六四五）八月に長谷川市郎兵衛が開板した『秘密念仏鈔』三卷も恵空所持本であった。両書とも時代を経て正尊が大正三年（一九一四）十月十七日に入手している。

『浄土真宗疑問解』三卷は、寛文十三年（一六七三）二月五日に恵空が執筆し、正徳四年（一七一四）五月に大坂の板元から出版された書籍である。それを大正十五年（一九二六）一月二十五日に正尊は購入している。そして第一巻の見返しへ購入年月日とともに「本書ハ真宗大谷派初代講師光遠院慧空師ノ著作也」と朱筆している。

以上、正尊は初代講師恵空の所持本や著書を意識的に入手したものとみられる。

ところで、『八宗伝来集』は正保四年（一六四七）十一月に平田半左衛門から刊行されたものだが、正尊は同書に興味深い書き込みをしている。

本書の作者は不明だが、「幼学」であるために凡庸な者が書いたものだろうという。そして「誤字モ亦多シ、記事取ルニ足ラズ、示観凝然公ノ八宗綱要スラ読了セシ者ニ非ルカ」と厳しい評価を記載している。それを正尊は昭和八年（一九三三）一月二十七日に購入しているのだが、それは「徳川初期ノ八宗記事ノ一参考トノ書庫ニ蔵スルモノ也」という。さらに初心者にとって、誤りの多いこの書はかえって害となるため見るべきでない、とまで記している。書籍入手にあたっての正尊の姿勢と、内容に対する評価を読みとることができるとして重要である。所蔵している書籍から得られる知識に対して、その所蔵者や入手者は、決し

て肯定的な場合ばかりではないことも明らかとなる。

〔整理作業の今後の見通しと研究意義〕

現在、書籍群のうち、刊本の約半分を整理した段階である。本稿で紹介した書籍の特徴はその一端にすぎない。今後、刊本の残り半分と、さらに写本やノート類の整理作業を進めることで、書籍群の全容を明らかにしていきたい。

前述したように、蔵書の大半は山上正尊が入手したものであり、入手の年月日やその経緯を朱筆で記している書籍も散見される。そしてその蔵書には、「山上正尊図書」「山上」といった朱印が捺されているもの、「山上正尊蔵」と署名されているものなどがある。

また近代に刊行された書籍のみならず、江戸期に刊行されたものも数多く含まれている。それらには「本慶寺蔵」と記されたものも多く、正尊以前から蔵書が蓄積されてきたこともうかがえる。

本慶寺所蔵書籍群の整理を進め、その内容を明らかにすることで、①山上正尊という美濃の真宗寺院で生まれ、東京・京都の真宗（大谷）大谷学で学び、尾張の真宗専門学校（東海）同朋大学で教鞭をとった人物の学問の歩みを知ることができる。それはそのまま②同朋学園の淵源における学問世界の特徴を明らかにすることになり、学園史にとって重要な意義を持つ。さらに③近代学史や宗門近代史へ新たな視点を提起することにもつながるものと考えられる。こうした課題は、ついには近世と近代を架橋する知の体系の解明というテーマに展開していくものになるであろう。

（1）「成業院山上正尊講師略年譜及び著書論文目録抄」（『同朋学報』同朋大学同朋学会、一九七〇年）など参照。

《研究会活動報告》

アジア仏教研究会

武田 龍

開催日 4/26、5/24、7/13、9/11、11/15、
12/20、1/17、2/16、3/16

参加者 玉井威・武田龍・宮崎保光・蒲池勢至・岩瀬真寿美・今枝由郎

アジア仏教研究会は、前田惠學先生の呼びかけにより二〇〇四年に発足した。仏教における最高究極の価値の探究をテーマとする。発足時のメンバーの多くが原始仏教を修めていたことから、原始仏教の知識を基礎として大乘を学ぶこととなった。先ずは最も身近な浄土教の理解を深めるために五年余をかけて浄土三部経を通読した。その後『法華経』（岩波文庫）の読解に取り組み、テキストの漢訳経典のほかに各自の必要とする資料を持参し、経典の文章を一字一句おろそかにせず、書いてあるままに読み、書いてあるままに理解する作業を続けてきた。今年度は「化城喻品」まで読み進んだ。最近は、異文明の交流と宗教（新しい価値観）の受容という観点から中国における仏典翻訳の事情と日本の漢文経典訓読法に関心が集まり、活発な意見交換をおこなっている。

化城喻品に「各以衣祴。盛諸天華」*Diyaṃs ca Smeru-māraṇ puṣpa-pūtaṃ gihīva*の句が現われる。*puṭā*は「物を容れる器」のことで箱か袋か皿か、通常「花皿」の訳語を充てる。花を盛る皿である。この句を訳せば「須弥山ほどの大きさの天上の花皿（にいっぱいの花）を持って」となる。原語 *puṭā* の素材は何であるかわからないが、「衣祴」という衣偏の文字を連ねて訳しており、布地でできた物のような理解である。「祴」には「衿」の意味があり、肩にかけて手をぬぐうことなどに用いられる布切れや衣の裾を言うときされる。「手ぬぐい」のような物という

ことなるうか。これは、羅什の翻訳グループ周辺の生活を反映したものと推察する。

同じく羅什訳『阿弥陀経』（西紀四〇二年訳出）にも「各以衣祴。盛衆妙華」の句が現れるが、原文に *puṭā* の語は無い。羅什は『法華経』（四〇六年訳出）より早い『阿弥陀経』の訳文中に原文には無い語を補い、仏への撒華の情景描写を同一句で表現している。先行する『阿弥陀経』の翻訳に『法華経』の経文の知識が用いられていることがわかる。翻訳完成の年次の順に訳経作業が進行したわけではないのであろう。

真宗史研究会

安藤 弥

二〇一七年度は次のとおり、二回の研究会を実施した。

第一回目（通算第三六回）

【日時】六月十五日（木）一六時三〇分～一八時

【報告者】安藤弥（所長）

【題目】「宗教一揆論をめぐる問題提起」

第二回目（通算第三七回）

【日時】十一月三十日（木）一六時三〇分～一八時

【報告者】祇津宗伸氏（浄蓮寺住職）

【題目】「親鸞伝絵」康楽寺本をめぐる考察―康楽寺京都説の再検討―

安藤は、本願寺・一向一揆論を中心に宗教一揆をめぐる研究状況を整理して示し（日本史研究会二〇一七年度大会で個別報告）、祇津氏は、長野県康楽寺に所蔵される『親鸞伝絵』の紹介から、諸本との比較検討、康楽寺京都説への批判、海野氏の動向などを論じられた。次年度も引き続き二回程度の研究会活動を予定している。

「日本仏教の成立と展開」研究会

脊古 真哉

「日本仏教の成立と展開」研究会（小島恵昭・大山誠一・黒田龍二・脊古真哉・吉田一彦）では、各研究参加者の研究領域・関心を基礎に、幅広く日本仏教・日本宗教に関わる問題を取り上げてきている。二〇一七年度には、二〇一七年六月三日および二〇一八年三月四日に研究会を、二〇一七年二月二六日・二七日の両日に現地踏査を実施した。

六月の研究会では、脊古の「田遊びと修正会の出会う場」の報告が行なわれた。研究参加者だけではなく、外部からの日本民俗学・民俗芸能研究などの研究者などの参加をも得て活発な議論を展開することができた。三月の研究会では、大山誠一客員所員の新著『神話と天皇』（二〇一七年 平凡社）の書評会を実施した。評者には上野誠氏（奈良大学・国文学）をお招きし、コメンテーターの吉田一彦客員所員、黒田龍二客員所員をはじめ、多くの方々の参加を得て有意義な議論を行うことができた。

現地踏査は奈良県宇陀市・三重県名張市の室生寺周辺地域を対象とし、一二月二六日には奈良県山辺郡山添村の毛原廃寺、名張市の弥勒寺、夏見廃寺・同展示館、丈六寺を、二七日には、宇陀市の新堂（安産寺）、室生龍穴神社および龍穴、室生寺、仏隆寺、大野寺を踏査した。踏査には研究会のメンバー以外に、研究所から藤井由紀子・中川剛の両氏、外部から曾根正人氏（就実大学）、上島享氏（京都大学）の参加を得て、各踏査箇所等について室生寺とその周辺の仏教文化の諸相を議論することができた。

東アジア仏教思想史研究会

藤村 潔

日時 6/28、7/27、9/21、10/26、11/30、1/29
参加者 玉井威、藤村潔、中川剛、高木祐紀、花栄、廣田万里子

本研究会では、鎌倉後期に活躍した華嚴宗の示観房凝然（一二四〇—一三二一）の文献を中心に研究している。主に『大日本仏教全書』に収録される『八宗綱要』二卷（二十九歳、以下『綱要』）の原典資料を定本に読解している。また、必要に応じて、同じく凝然の『三国仏法伝通縁起』三卷（七十二歳、以下『縁起』）、同時代の存覚『歩船鈔』二卷の資料を参照している。

今年度は『綱要』と『縁起』の「律宗」の教説について比較検討を試みた。特に『縁起』で説かれる律宗は他の教説と較べて極めて分量が多く、中国・日本伝来の戒律史を詳説している。そのため、研究会では『縁起』に説かれる戒律の伝承を具体的に究明した。

凝然は南山律師道宣（五九六—六六七）の『四分律行事鈔』に基づく律を重要視する。また、彼はそれを日本に伝えた鑑真和尚（六八八—七六三）の功績を高く評価し、戒壇設立の歴史的過程を詳しく紹介している。凝然の立場は、華嚴宗と律宗を軸に置いているため、天台宗の最澄が説くような大乘戒（円頓戒）に対しては批判的である。この点、彼の活躍した時代が末法を背景としているため、南都戒律の復興とその優位性を誇示していると推察される。

次年度では、『八宗綱要』を基本に据えて、諸種の文献を比較しつつ、第四の「法相宗」の研究に取り組み予定である。

仏教教育研究会

北畠 知量

この研究会は、前年度同様、会員が仏教教育関係の論文を発表し、参加者と質疑応答する形で進めてきた。参加者の日程調節が難しく、会を
持てたのは次の通りであった。

- 5/17 北畠知量の発表「真宗の社会関与」
- 8/2 花栄の発表・無題
- 10/4 岩瀬真寿美の発表「教育愛の語られ方の変遷」
- 1/23 北畠知量の発表「横超の教育」

教行信証学習会

吉田 暁正

- 講師 森村森鳳(張 偉)先生
- 趣旨 漢文として『教行信証』を読む
- 会場 同朋学園Dオプラザ閲蔵2F 多目的会議室
- テキスト 東本願寺刊『真宗聖典』(必要に応じて資料配付有)
- 開催日 5/25、6/22、7/27、9/28、10/26、
11/30、1/18、3/22

『教行信証』「化身土卷」を読み解きつつ、親鸞が言葉の中に込めたメッセージを確かめるように学習を進めている。今年度は、親鸞の言語表現において、音声がどれほど重要なはたらきを持つかということを確認した。

『教行信証』においては、特に漢字の音声について注記されている箇所がある。その中で「行卷」に記されている「命」と「稱」の漢字について、親鸞がどのような意味とはたらきを見ていたかを確認した。(『真宗聖典』169頁)

「帰命」の「命」については、「命字 眉病反 使也 教也 道也 信也 計也 召也」と注記されている。「眉病反」の「反」は、反切という古来中国で文字の発音を示す方法を表している。命の字は、眉と病の音を合わせて発音する言葉であることを示し、その上でこの文字が表す意味を確かめている。

「如来の名を稱す」の「稱」については、「稱字 処陵反 知軽重也 説文曰 銓也 是也 等也 俗作秤 云正斤両也 昌孕反 昌陵反」と注記されている。ここでは三つの発音を示し、1、称えるという動詞、2、秤という名詞、3、意に合うという形容詞という三つの意味を、一つの「稱」という漢字が表していることを確かめている。

このような親鸞の文字への厳密さは、単に言葉が意味を伝えるということに留まらず、音声という響きに重要なはたらきがあると受けとめていたことによる。意味を超えて人間にはたらく法の力が、音声という響きをもって大事にされてきた。そこに「南無阿弥陀仏」という念仏の相續がある。この視点を踏まえつつ、今後も「化身土卷」を読み進めた

《特別活動報告》

全国大学博物館学講座協議会西日本部会 平成二十八年度研究助成
「大学ギャラリーにおける体験的、継続的な史料展示の実践」

このたび、全国大学博物館学講座協議会西日本部会から研究助成を受けたので、その内容を報告する。

◆研究課題「大学ギャラリーにおける体験的、継続的な史料展示の実践」

◆研究領域・博物館展示論、博物館情報・メディア論、博物館教育論、博物館実習

◆研究代表者・同朋大学（愛知県名古屋市）安藤弥（文学部教授）

◆研究の概要・大学ギャラリーにおける実物史料展示（歴史文化・仏教文化的な絵画・書籍・文書が中心）において、次のよう展示方法を試験的に実践する。

1. 「来て見てさわって」をコンセプトに実物史料を間近で観覧、また史料を限って実際に触れてもらう体験的展示を行う。
2. 長尺卷子や掛軸裏書など、全内容展示の難しい史料に関して、先にアーカイブ的にデジタル保存した情報をPC・プロジェクターを用いて同時可視的に展示する。
3. 右記1. 2. による展示の魅力を伝え、継続的観覧（リピーター）を促すフィードバック学習を行う。

◆研究の実践（報告）

〔企画概要〕

前年度前期史料展示「聖教は読みやぶれ……来て見てさわって真宗文化」の成果を基盤に研究助成を申請し、本年度前期史料展示では、その継承発展版として「お経のかたち～来て見てさわって仏教文化～」をテーマに研究実践した。

展示に際しては通例通り図録を作成し、さらに映像の作成・放映を特別に実践した。スタッフは、蒲池勢至（研究顧問）・安藤弥（所長）・藤井由紀子（所員）・大畑啓（所員・展示主担当）・日比野洋文（特別研究員）・中川剛（客員研究員）・古川桂（本学専任講師）・瀬尾正寿（本学非常勤講師）、学芸員課程履修生十八名ほかである。来場者は約三〇〇名を数えた。

関連企画として展示会場においてワークショップを開催した。テーマは「関係しあう私たち―視覚障害者をつくる史料鑑賞ワークショップ―」で、ゲストに白鳥建二氏（マッサージ師、ミュージアムアクセスグループMARメンバー）をお招きし、リードユーザーとして齋藤聖（本学院生）、市川綾子（本学学部生）らが参加した。当日には、オープンキャンパスに訪れていた高校生の参加もあった。

〔実践内容〕

①史料展示（担当＝大畑啓）

前年度前期に開催した「聖教はよみやぶれ……来て見てさわって真宗文化」展では、観覧者が実物資料を手に取りながら仏教文化を体感できる展示を実践した。今回は、同様のコンセプトの第二弾企画として、仏事において拝読に使用される経本・声明本などのかたちに触れることで、仏事等での扱い方を体感し、そこにひそむ仏教文化の息吹を学んでもらえる展示を開催した。

展示は三部構成とし、すべてではないが、三部を通じて手に触れてもらえる史料を中心に展示構成した。Iでは「さまざまなお経のかたち―卷子から折本・冊子へ―」として、日本へ伝来してから現在に至るまでのお経のかたちの変遷を大まかにたどり、一般の書物のそれとは異なる特徴などを展観した。

IIでは「読む・聴く・唱和するお経と声明―真宗仏事とお経の伝統―」として、真宗の経本・声明本・拝読物に見られる様々なかたちを示し、使用される仏事の格式やその頻度、または当初のかたちや使用方法など

の違いを踏まえつつ、それぞれの利便性や伝統的側面を展観した。

Ⅲでは「実践コーナー お経のかたちを体感しよう」として、経本・声明本の扱いかたを実践してその違いを体感できるように、扱い作法の実演動画「お経の扱い方―真宗大谷派の場合―」（約七分）を研究所で独自に制作し、PCで常時再生しながら、巻経・折経・冊子それぞれの実物資料とともに展示した（この動画は、DVD貸出などの方法で教材として提供することも考えている）。

本展示では、展示ケースに「法隆寺一切経」などの貴重な古写経も含めて出陳したため、必ずしも手に触れてよいものばかりを展示したわけではない。しかし、貴重資料から伝来当初以来のお経の伝統性を読み取ってもらいながら、様々なかたちの経本・声明本にも触れてもらうことで、実物資料から感じ取れる内容により深みが出たと思われる。

また、扱い作法の違いからそれぞれの利点・欠点などを実感し、かたちが変化した理由や今も残る伝統性の魅力を理解してもらうことを目的として、観覧者が実践しやすいように実演動画を制作・展示した点も、本展示の大きな特徴である。

実物展示や解説だけではわからない要素を映像資料として展示することで、お経のかたちに根付く日本の仏教文化の特徴やそれに関する問題を、観覧者がより積極的に考えることにつながったと思われる。

②ワークショップ（担当＝藤井由紀子）

関連企画のワークショップは、全盲者を含む本学学生がリードユーザーとなり、ゲストに招いた白鳥建二氏や一般の観覧者も交え、展示会場においてコミュニケーションを通じた史料鑑賞を行うという企画であった。

白鳥氏は、自身も全盲であり、視覚障害者とともに美術を鑑賞することの有効性をさまざまな機会が発信しながら活躍してきた人物である。目が見える人が全盲者とともに展示品にじっくり手に触れ、両者がその特徴を事細かく伝えあうことにより、経本や声明本のかたちに関するさ

まざまな特徴をより具体的に把握・共有できた。

また、学生や観覧者に対して、コミュニケーション能力や多角的視野を養う機会を提供するということも、この企画の大きな目的であり、参加者が主体的かつ積極的に発信しようとする姿勢がみられた。

〔総括〕

「実物資料に学ぶ仏教文化」を基本姿勢とする本研究において、史料展示は、その研究活動の蓄積と成果を発信し、社会に還元する機会として、重要な位置を占めている。本展示では、その方針に基づき、観覧者実際に触れてもらうことを柱に据えながら、さらに上記のような種々の工夫を試みた。これにより、観覧者が単に「学ぶ」だけでなく、肌で感じ取り、考え、伝えあい、共有することができ、社会への還元という目標の一端が、より充実した内容で実現できたのではないかと。

今後も、右記のような工夫を展示のツールとして適宜導入し、さらなる試みをも駆使して、有意義な史料展示に取り組んでいきたいと考えている。



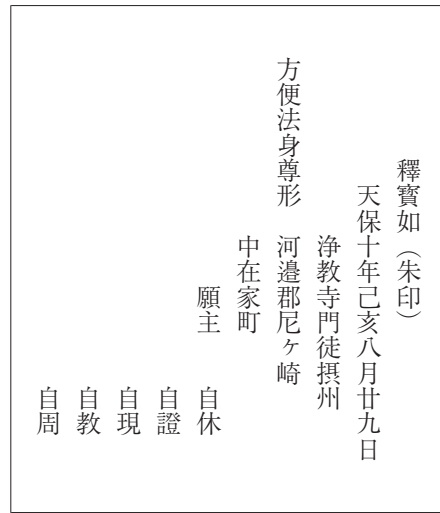
実践コーナーでの映像展示



ワークショップの様子

《研究所新収史料について》

- 宝如裏書方便法身尊像 掛軸装 一幅
 ・本紙 絹本着色 縦四二・〇cm×横一九・五cm
 ・裏書（紙本墨書 直書）



方便法身尊像（阿弥陀如来絵像本尊）がまた一幅、縁あって研究所の所蔵に帰した。この一幅の歴史的意義は何と言っても、授与者が宝如であることで、新発見であり、これ以外に今のところ事例は知られない。

宝如とは東本願寺二十代達如の長男で、文化十（一八一三）年に生まれ、「新門」となるが、天保十二（一八四一）年に二十九歳で没した（そのため、東本願寺は次男厳如が弘化三（一八四六）年に継いで二十一代となっている）。

本願寺を継職しないまま没したとみられていた宝如なのであるが、この一幅の裏書には確かにその名が記され（ただし「大谷本願寺」は記されていない）、天保十（一八三九）年八月二十九日付で撰津国河辺郡尼

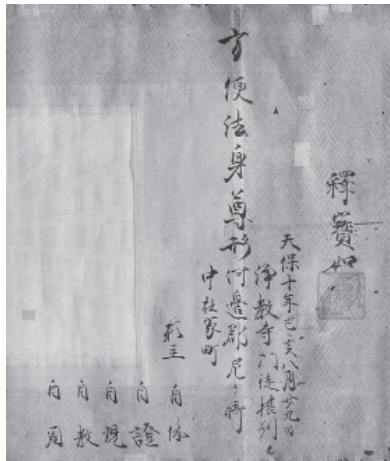
崎中在家町の浄教寺門徒である自休ら五人に授与しているのである。

これをどのように考えるかは今後の大きな課題である。なお、付随文書からこれを受領したのは「和泉屋」であることがわかり、屋号を持つ尼崎の商人とみられる。願主の自休が和泉屋であろうか。願主が自休以下五人連名であることも含め、こうした東本願寺門徒の実態も追及すべき課題である。表画もこの時期のものにしては精緻な制作となっている。裏書は直書である。

（写真 表画）



（写真 裏書）



二〇一七年度彙報

《研究所構成メンバー》

所長 安藤 弥

所員 ブレニナ・ユリア（人文学科） 木野美恵子（社会福祉学科）

所員・幹事 市野智行（仏教学科）

研究顧問 小山正文 小島恵昭 玉井威 蒲池勢至

所員（非常勤） 大艸啓 藤井由紀子

客員所員 青木馨 岩瀬真寿美 大山誠一 岡村喜史 北畠知量

ギヤナ・ラトナ 工藤克洋 黒田龍二 嘉木揚凱朝

脊古真哉 武田龍 服部仁 藤村潔 松金直美

吉田暁正 吉田一彦

客員研究員 飯田真宏 花栄 川村伸寛 周夏 高木祐紀

中川剛 新野和暢 松山大

特別研究員 日比野洋文

《所員会議》

4 / 18、5 / 16、6 / 1、7 / 4、9 / 19、10 / 17、11 / 6、

12 / 12、1 / 16

《公開講座等》

・現地ですぶセミナー

第1回 7 / 8 「講師」脊古真哉

第2回 10 / 19 「講師」藤井由紀子

「東紀州街道をゆく―三重県尾鷲市・熊野市―」

「越前の開拓伝承を探る―継体天皇から春日明神の神託へ―」

☆同朋大学仏教文化研究所設立四〇周年記念シンポジウム

「アジア仏教の死者・供養観」

〔日時〕 2018年1月20日（土）13時30分～16時30分

〔会場〕 ホールD〇（同朋学園D〇プラザ閣蔵1F）

〔基調講演〕 蒲池勢至（日本） 嘉木揚凱朝（中国）

ギヤナ・ラトナ（バンングラデシユ）

〔コーディネーター〕 武田 龍

《ギャラリー史料展示》

・前期（7 / 7～7 / 13）〔担当〕大艸啓

「お経のかたち―来て見てさわって仏教文化―」

※関連企画（7 / 8（土）14時～17時、於展覽会場）

「関係しあう私たち ―視覚障害者をつくる史料鑑賞ワークショップ―」

〔ゲスト〕 白鳥建二氏（マッサージ師、ミュージアムアクセ

スグループMARメンバー）

「リードユ―ザー」齋藤聖（本学院生）、市川綾子（本学学部生）

・後期（1 / 16～1 / 30）〔担当〕安藤 弥

「仏・仏―めくるめくアジアンブッダワールド!!―」

《史料調査活動》

・真宗寺院史料調査

4 / 19 西厳寺（浄土真宗本願寺派・岐阜県各務原市）

4 / 22～23 真宗大谷派吉崎別院（福井県あわら市）

6 / 3 西厳寺（浄土真宗本願寺派・岐阜県各務原市）

9 / 6 正定寺（浄土真宗本願寺派・奈良県宇陀市）

9 / 7 本善寺（浄土真宗本願寺派・奈良県吉野町）

3 / 5～6 浄称寺（浄土真宗本願寺派・奈良県五條市）

浄称寺（浄土真宗本願寺派・岐阜県海津市）

その他（随時、持ち込み、問い合わせのある史資料の基礎検討など）